

## 実践報告

### コロナ禍の中、オンラインで実施したチャイルドライン北九州の継続研修 — 性化行動と性被害のケースをとりあげて —

河嶋 静代

Practice Report

Continued Training by Kitakyushu Childline Conducted Online During the Covid-19 Pandemic

— Taking Up the Cases of Sexualization Behavior and Sexual Damage —

Shizuyo Kawashima

#### はじめに

チャイルドライン（以下 CL と称す）は、18歳までの子ども声を聴く民間の子ども専用電話である。CLは相談電話に限定せず「何でも聴くよ」と雑談もOKの電話で、子どもの心の居場所になることをモットーに、全国の約70団体と連携しながらフリーダイヤルで子どもの声を聴いている。

筆者は、NPO 法人チャイルドライン北九州の理事長として、その運営や電話活動、研修係など全般的な活動にかかわっている。

2020年の春からの新型コロナウイルス感染拡大の影響が、子どもやチャイルドラインの活動にも大きな影響を与えた。4月上旬にコロナ禍の中で緊急事態宣言がなされ、CL北九州は活動を一時停止し、宣言が5月中旬に解除されてから、CL北九州では感染予防に万全の対策を図り活動を再開することになった。

コロナ禍の中、子どもたちの電話ではリモートで男女の高校生たちが服を脱いで「裸を見せあっている!」とか、「兄と母がおかしくなっている（近親姦）」というような電話が入るなど、性に関する電話が普段以上に目立つようになっていた。

性に関する電話は、通常からSEX電話と思われるような悪戯電話等があり、電話の受け手たちのモチベーションの低下を招いたり、CLのメンバーたちが性の電話をどう理解すればよいのかという疑問や自己不全感を常に抱えているような状況があった。

CL北九州では、毎年開催するボランティア養成研修や北九州市男女共同参画センター「ムーブ」でのシンポジウムを実施しているが、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止に

なった。また、CLの受け手や支え手たちが電話対応等について振り返る「継続研修」を年に数回実施しているが継続研修の実施も不確定なので、コロナ禍の中でこうした閉塞的な状況を打破するために、タイムリーな課題である「子どもの性の問題」をテーマにした継続研修をオンラインにより、実施することを提案、実施することにしたのである。

本稿では、2020年8月、9月に実施したCL北九州の継続研修の取り組みについて報告する。

## 1. CL北九州の研修の概要

### 1) CLの研修の種類

CL北九州における研修には、電話の受け手に対するボランティア養成研修と継続研修、チャット<sup>1)</sup>の受け手に対する研修がある。今回、報告するのは、電話の受け手対象者への継続研修についてである。

CL北九州の受け手を養成するため、毎年1回ボランティア養成研修を実施。5月上旬から7月下旬にかけて計10回、のべ約30時間以上の研修を行う。継続研修は、電話の受け手、支え手を対象にした研修で毎年、年3回ほど実施する。電話の対応の仕方や事例検討などを行う。以前は、電話対応の振り返りを電話を受けた後にしていたが、受け手が傷つき電話をとれなくなった経験がある。そうした経験から現在では個別のスーパービジョンではなく、継続研修の検討事例として、グループで話し合うという方法を取っている。

### 2) これまでのCL北九州の性に関する研修と課題

全国のCLに寄せられる性の電話は多い。CL北九州の主訴別件数では、2016-2019年度では二位、それ以前の2007年度-2015年度では一位を占めていた(その後分類が変更したため)。主訴が「性」は例年約3割を占めている。

CL北九州では、電話から見える子どもの性の問題を「北九州市の子どもの性の現状と課題—子ども専用電話に寄せられる子どもの声の分析から」という調査研究報告書(2005年度北九州市ジェンダー問題調査・研究支援事業)にまとめた<sup>2)</sup>。同調査によれば、2003年-2006年までの3年間にCL北九州に寄せられた総受信数は2116件(無言電話を含む)のうち、「性に関する電話」は392件で、全体の18.5%であった。この調査と条件が異なり単純には比較できないが、今日の性の電話では、数も増え質も違ってきているように感じる。それは、自慰がやめられない、近親姦やその願望や欲求など「性的欲求のコントロール」ができないという頻回者の電話が目立つことである。

CL北九州の性に関する研修は、これまで「性に関する研修の手引き」をもとに、ボランティア養成研修で基本原理を学ぶと共に、CLの性の事例等をもとにロールプレイや電話のかけ手(コー

ラー)と受け手が相互尊重で向かい合えるように、性の電話が不快と感じた場合にNO!と言えるような練習もしてきた。

CLの性の電話への対応を図るために、CL北九州では、外部の性に関する専門家を招いた講演会も実施したことがある。2012年7月には、北九州市市民企画事業ムーブフェスタにおいて『性非行少年の心理療法』の著者、精神科医の針間克己氏(日本性科学学会幹事長)を招き、「チャイルドラインと若者の性暴力」というテーマで講演会を実施した。また、2018年11月、「チャイルドライン20全国フォーラム in九州」(福岡にて開催)において性に関する分科会で「ちっちゃいけど大きい男子のシモのお悩み」というテーマで聖隷浜松病院、泌尿器科の今井伸氏が講師の分科会にCL北九州のメンバーも参加し、性器の仕組みや性教育をタブー視する弊害や健全なマスターベーションについて学んだ。それらの研修の学びは、電話活動に活かされている。

しかし、例えば、「24時間性のことを考え、マスターベーションがやめられない」という電話に対して、CLのメンバーたちは、「体に悪くないので、大丈夫ですよ」というような応答をしているが、それ以前に催された「チャイルドラインと若者の性暴力」針間氏の講演会で学んだように、暴力的なアダルトサイトをみて妄想を膨らませ自慰をすることが習慣化すれば、幻想と現実との境目がなくなり、性暴力の引き金にもなることがあるし、また、無力感や失望感などネガティブな情動を抱いているときに、それを発散するような自慰行為は依存と繋がる可能性もある。個々のケースの特性を踏まえず、自慰行為はすべて「からだに悪くないから、大丈夫」とは言い切れないのである。

電話の受け手たちが多様な性の電話がある中で、研修で得た断片的な知識をどう統合し、それらをどのように自分の中で消化し、どのようにケースに応用していくのかは難しい課題である。

## 2. 性に関する継続研修を実施して

### 1) 研修でとりあげる性被害のケースについて

研修では、2019年度の電話記録の中から、性に関する電話195件のうち、性加害や性被害の声、児童虐待、近親姦、性的いじめなど多様な声に着目した。

研修では、研修係と相談し、特に筆者が気になる3つの性被害についてのケース(声)をとりあげた。それは、①「義父からの性的虐待を受けた女子」②「母親の性行動に悩む男子」③「性的いじめを受けた男子」のケースである。3つのケースは、①については女子が性被害の後遺症として露出や自慰が止められないというトラウマボンド(外傷性の絆)、②は母親の養育(ケア)の中で子ども個人へのプライベート・ゾーン(心理的・身体的境界線)への侵入と子どもの自主性の剥奪、③は性的いじめによる心的外傷のケースである。

3つのケースに共通する点は、①性被害を受けている、②性的欲求の抑制困難など「性依存」の

可能性がある、③理解が難しいケースである、という点である。

研修では3つのケースを取り上げたが、それらが特別のものではなくて、CLの電話記録では複数の類似ケースが散見できるようなケースでもある<sup>3)</sup>。

CLの電話は一期一会の電話である。対面的な面接と異なり、表情もわからず、かけ手の表層の部分しか見えないことが多い。そこで、3つのケースと現実の社会の中で、類似するケースを探し、当事者からヒアリングを行うことで、CLのケースを理解する手がかりとした。

## 2) 研修の対象、方法、プログラム等

継続研修の参加者は、CL北九州の電話の受け手、支え手が対象。リモートによる研修である。最近、電話活動に来ていないメンバーや大学を卒業して遠方に転居した会員も参加するなど、リモートならではのメリットがあった。

研修講師としての筆者は、パワーポイントを用いた研修内容の説明に入る前に、CLのケースをどう理解するかについて、参加者各自の経験や価値観などが反映するが、自分の感性や捉え方を大切にしてほしいこと、同時に、人は多様なので、他の人の見方も尊重できるように、視点の広がりを持ってほしいという筆者の思いを参加者に伝えた。

(表1) CL北九州継続研修プログラム

CL 北九州第1回目継続研修プログラム	
2020年8月29日(土)	
AM 9:30～11:30 (ZOOM)	
テーマ「CLの性被害の3つケースを中心に」	
1. 開催にあたって 配布資料の確認	9:30～9:35
	(進行:研修係H)
2. 研修前アンケート	9:35～9:40
3. 「CLの性被害の3つケースを中心に」	9:40～10:20
	講師:河嶋、助言:精神科医F
4. <u>グループに分かれて話し合い</u>	10:30～11:10
5. 全体での分かち合い、各グループからの報告	11:10～11:30
6. アンケート記入と提出について	

CL 北九州第2回目継続研修プログラム	
2020年9月26日(土)	
AM 9:30～11:30 (ZOOM)	
テーマ「男子の性被害と性依存—2ケース」	
1. 開催にあたって	9:30～9:35
	(進行:研修係T)
2. 配布資料の確認	9:35～9:40
3. 「男子の性被害と性依存」	9:40～10:30
	講師:河嶋
4. <u>全体での話し合い</u>	10:30～11:20
5. アンケート記入と提出	11:20～11:25
6. 終わりのあいさつ	11:30

(表1)は、1回目と2回目の研修のプログラムである(変更点等を下線に)。1回目の事例検討は、3ケース、2回目研修では、1回目のアンケートの結果、参加者の理解が不十分だった前回の2つのケースを繰り返し補足する研修内容にした。また、プレゼンテーションの後の話し合いでは、一回目の研修は3つのグループに分かれて話し合いをしたが、2回目の研修では人数も少ないので、全体での話し合いに変更した。

### 3) 研修内容と倫理的配慮

#### ①ケース理解のために

・ケース1「義父から性的虐待を受けた女子」では、性被害の後遺症や性化行動やトラウマボンドについて理解するために、小学生の時に実父から性的虐待を受けた女性Aさん(当事者として社会活動をされている)からヒアリング(ZOOM:2時間)をし、CLの1のケースについてどう思うかAさんの意見を求めた。そして、Aさんからのコメントを参考に同ケースについて考察した。

・ケース2の「母親の性化行動に悩む不登校の男子」では、CLのケースと関連させ、かけ手の母親の性化行動とトラウマボンドについて考察した。Aさんからのヒアリングによるトラウマボンドの指摘と、1回目研修参加者の感想において、虐待で保護された経験のあるBさんの「共依存」についての指摘を受けて、Bさんからのヒアリング(対面:2時間)をさせてもらい、その内容を2回目の研修内容に活かした。

・ケース3の「性的いじめにあった男子」では、男性の性被害の治療を行うカウンセリングルームの症例を参考事例として取り上げた。

#### ②倫理的配慮

CLのケース、1、2、3は、筆者が電話の受け手又は支え手としてかかわったケースである。CLの電話は子どもたちに、“名前はいわなくていい”、“秘密は守るよ”と「約束」している。秘密保持の原則を守りつつ、子ども権利の侵害について、社会発信をすることのCLの使命との間で、せめぎあいがある。倫理的な観点から、内部的な研修で取り上げた内容をそのまま、紀要に掲載することはできない。ケース(声)の取り扱いにあたって秘密保持の観点から、3つのケースの内容は個人が特定されないように内容をシンプルに、また、いくつかのケースを組み合わせるなど大幅に加工した。

CLのケースをAさん(外部者)、Bさん(CLのメンバー)に意見を求めるために、ケースを紹介する場合には、秘密保持の観点からケースの内容を口頭で伝えた。

また、ヒアリングさせていただいたAさんとBさんから得た情報の開示については、使用箇所を具体的に示し、①研修での使用と②北九州市立大学紀要の掲載にあたっての承諾を得た。

### ③研修内容

#### ケース1 「義父から性的虐待を受けた女子」

小学生の頃から男子に体を見せる癖があり、今も治せない。満員電車に乗り今まで何回も痴漢に会った。ドキドキする気持ちが押さえられず痴漢にあうように混んだ電車に乗る。自分が変質者じゃないかと思う。盗撮されても拒否せず、相手について行って写真を撮らせることもあった。わざと露出の多い服を着て肌を見せたり、外で裸になっていい気持ちになったりする。からだに常にかまみ出来ない。お父さん（義父）に小さい時に性的虐待された。一緒に暮らしていたお父さんのことが頭から離れない。写真やビデオを撮られ、気持ちの良くなることを教えられた。私は病気じゃないか、私は変な人になってしまうのではないか。

ヒアリングさせていただいたAさんは、小学低学年から20代の初めまで父親からの性的虐待を受けた。夜眠っている時に父親に体を触られ、幼かったので最初何をされているのか分からず動揺したが、その後、加害が繰り返される中で意に反して体は気持ち良くなっていった。性的行為が繰り返される中、被害を訴えたと家族がバラバラになると思い沈黙を守った。中学や高校時代は、過度な自慰行為や男性と愛のない性行為などに耽溺していったという。

Aさんは、CLのケース「性被害を受けた女子の“自分は変になってしまった”という気持ちは、“よくわかる”という。自分も小学校の時、掃除の時間に体育館の倉庫に隠れて自慰行為をしたこと、服の短いスカートををはき、スリッパをはかないで見られるスリルを味わったこと、「それらの行為がどうしても止められなかった。」という。Aさんは、CLの被害女子のケースについて、「痴漢を受けても逃げない、痴漢されたいと思う。盗撮する加害者について行って写真を撮らせることは再被害化で、犯罪に巻き込まれる可能性がある。」と指摘した。また、被虐待児が周りに“助けて”と言えないのは、「自分の場合のように、言えば家族が傷つく。自分さえ黙っていれば家族の平穏が保たれると思ったからではないか」という。

「どうしたら周りの人が気づくことができるか？」と筆者が尋ねると、「先生に虐待を受けていることを言いやすい環境をつくる。保育所などで水着で隠れるプライベートパーツを自分以外の人が触ったら、大きな声でNO!と言う練習をする。」「私が初めて父親からされた時に変なことされているのに、嫌だけとお父さんだからそういうことするのはいいのかなって、最初何をされているのか分からず、ピントこなかった。親しい人が触ってきても、“だめだよ”って言っていていいんだという教育が幼い頃からあったら、くい止められた。」と述べた。

CLではどのような電話対応をすればよいか質問すると、「否定的な意見とか、“なんでそんなことをしてしまうの？”という言い方をすると話せなくなるので、ただ聴いてほしい。」「自分の行動に対してどうなりたいか？また、将来どんな人間になりたいか？夢とか希望とかが感じられるよう



な質問をしてほしい。」また、「誰にも愛される資格がないと思っているので、自尊心を上げるような支援をしてほしい」というアドバイスもらった。

研修では、本ケースを理解するキーワードである「性化行動」（性被害に遭った子どもに見られる年齢に不相应は性的行動で、性被害の後遺症の反復行動）や「トラウマボンド」（“外傷性の絆”と称され、性被害と同じような場面や状況に似ているものに引き寄せられ、それを再現しようとする）についても説明した。

## ケース2 「母親の性行動に悩む男子」

学校でいじめにあい不登校に。母親のことで悩んでいる。中学の時、母親は自分をハグして胸を押し付けたり、色々エッチなことをしてきて、それを同級生に見られ、いじめられるようになった。母親は人がいる前でも足を広げてしゃがんだりして露出する。友達が家に遊びに来た時もセクシーな恰好を試してみんなに下着姿を見せたり、家に遊び来た男性と母親と一緒にみんなの前でエッチなことをしている。そんな光景を見て、友達は嫌になり帰ってしまう。母親はお酒を飲んだ時、露出がひどくなり、パンツを脱いで局部を僕に見せる。普段は優しいお母さんだが、お酒を飲んだ時、母親の露出がひどくなるので嫌だ。

ケース2の男子は、日常生活において、過度な性的刺激に曝されており、性的虐待といえる環境に置かれている。母親は中学生の息子に対してベタベタ密着している。

研修では、母親は、性的虐待の被害者に見られる「親密さ」と「性関係」の混乱が見られる。その点について、自身が性的虐待を受けたAさんに意見を伺うと、「お母さん自体にトラウマみたいのがあって、それが性化行動に結びついているようだと思う」、「母親が密着したり、プライベートゾーンを見せるというのは、被虐待児(者)の性化行動かもしれない」とAさんは答えた。研修では、そのようなAさんのケースに対する見方を伝えた。

また、同ケースについて、CLの研修参加者で「共依存」の視点を示してくれたBさんは、後で知ったのだが、「障害者虐待」で保護された経験がある。

Bさんは、精神的に不安定な母親の過干渉で、母親が子どもから離れることができず、通学も小学から大学になるまでいつも送迎されていたそうだ。母親に従順に従うことを強要されてきたので、他者との関係においても自分の気持ちを表出することが難しく、それが身体症状として出るという。母親との愛着が内在化し、それが他者との関係の取り方として機能する内的作業モデルは、Bさんの場合、母親との関係のように他者と接する時も従順で笑顔で接するので、そうした態度が異性から見ると自分に好意があると誤解を与え、よくセクハラにあったという。母親は養育（ケア）の中で、入浴した時も、あたかも自分の身体を洗うようにBさんのプライベートゾーンに触れたという。

長年、身体的にも精神的にも個人としての境界線をBさんは母親に侵され続けてきたのだった。

Bさんは、ケース2について①「母親の性化行動と息子への慢性的な境界線の侵害」、②「共依存」で、息子の乳幼児期からの子育て（ケア）の中での身体的、心理的な境界線の侵入の可能性について指摘した。

1回目の研修では、ケース2についての参加者の理解が不十分だったので、「共依存」視点を示唆してくれたBさんへのヒアリングを踏まえて、養育（ケア）の中で行われる「共依存と性加害」の視点を2回目の研修の内容に加えた。

養育（ケア）の中で見られる被虐待児の性化行動について、榎本稔著『性依存の治療』では児童養護施設での被虐待女兒（脱抑制型愛着障害）<sup>4)</sup>が男性職員にベタベタ身体接触をし、女兒から挑発されていると感じる場合があることや、虐待された男児が添い寝をしている女子職員の太ももにペニスを押し付けることがあり、そうした行為は、家庭で性的刺激に曝されていたと推測される例が掲載されている<sup>5)</sup>。

CLの電話では母子のケアの中で、また、障害児をケアする家族の中での「プライベートゾーン」への侵入など「性的虐待」や「近親姦」と疑われるケースも散見される。上記にあげたCLの2のケースのように、母親が息子に対して、幼児期からの養育の中での性的な接触や曝露、境界線の侵入を行っていても、子どもの側は生活場面での世話の中で行われているので性的虐待と気づきにくいという問題点があることを認識しておく必要があると思う。

### ケース3. 「性的いじめにあった男子」

中学の時、部活で先輩から服を脱がされた。泣きたい。数人で首を絞められ服を脱がされた。女子マネージャーもいて、オナニーをさせられた。オナニーをしていて精液が出てきたときに、マネージャーが近づいてきたのでマネージャーの体操服に付いてしまった。

（電話の受け手が感じたこと一部活で服を脱がされ、首を絞められたと語るところまではそのいきさつを詳細に語り、内容もリアリティがあり、被害に遭って嫌だったという感じが伝わってきた。しかし、最後の所で自慰をさせられ精液がついたというあたりで、電話向こうのかけ手の息づかいが荒くなり自慰をしている気配を感じて、作話かな（推測）と思い、何か騙されたような感じがした。）

CLに寄せられるクラブの先輩たちや同級生からの「性的いじめ」の声は年間数件ある。「服を脱がされたり体を触られたり、被害の場所は公園や部室などで、親に絶対ばれたくない。最初は何もなかったが、興奮したり、勃起したり、触れだしてから夜眠れない、こんなことをされて頭が変人にならないか不安」と訴えるなど、泣きながらかけてきたケースもある。



ケース3を理解するために、「性的いじめとトラウマボンド」について記されている文献を探していると、カウンセリングオフィス Pomu のホームページに「過去に性的虐待を生き抜いてこられた男性のために」で、「性的いじめ」にあった男性の被害者の事例が掲載されていた<sup>6)</sup>。そこで紹介されている40歳男性Sさんのケースを読んで理解の手がかりとした。

Sさんは中学のときの性的いじめに遭い、セクシュアリティが大きく歪められ、一生を左右されるくらい大きな影響が体と心に焼き付いた。そのために女性と付き合うことや結婚もできなくなってしまうという。

Sさんは、いじめっ子に服を脱がされたとき、頭ではいやなのに勃起をし、こうしたいじめが繰り返されるにつれ、これまでは逃げていたのが、触れられたい、見られたいという感じになっていったという。こうした変化について、カウンセラーは、Sさんが、性的いじめを思い出すと辛さと性的興奮が出てきて、頭（認知）では嫌と思いつながら体は快感を求めたり、トラウマの内容が嫌なことでも強烈に引き付けられて興奮する場合があることを指摘し、脳のメカニズムとして自分を守るために脳がオピオイド（痛みを和らげる化学物質）を出し、その快感物資のとりこになり、性的いじめを再度経験したくなったり、性的コントロールができなくなったりすることについて科学的視点から説明している。

1回目研修前の参加の感想では、「恐怖の環境下では、普通の男性は勃起したり射精できない」というようなコメントが複数あったので、2回目研修では、泌尿器科医池田稔氏の「苦痛や恐怖を感じ、性欲が起りえない状況であっても、強制的に刺激を受ければ、ペニスは勃起し、刺激が続けば射精をする。だから勃起して射精があっても、男性の同意があったことの証拠にはならない、その行為を望んだことにはならない。」<sup>7)</sup>との見解を紹介した。

研修の最後では、今回の3つのケースに関連する「トラウマボンドと性依存」との関係や、CL北九州の電話では、日常的に性依存と思われる男子からの頻回電話があるので、性依存と脳のメカニズムについて、「依症に陥った脳が理性や意思を乗っ取って（脳の思考を担う前頭前野の機能が低下）、自分の意思でコントロールすることが困難になる。特に子どもは前頭前野が十分に発達していないため嗜癖行動にのめり込む危険性が高い」という補足説明を精神科医のFさんから分かりやすく図を用いてしていただいた。

### 3. 研修についてのアンケートと感想

#### 1) 研修参加者へのアンケート

継続研修の成果を図るために、参加者に向けて研修前と研修後に①理解度についてのアンケートと②感想を記入してもらった。1回目研修の参加者は20名、アンケート・感想（研修前・研修後）の回収は18名。2回目の研修の参加者は16名、アンケート・感想（研修後のみ）の回収は14名<sup>8)</sup>である。

表1. 研修前・研修後のアンケート

	1回目研修前	1回目研修後	2回目研修後
ケース1	①0 ②3 } 6/10 ③3 (人) ④0 ⑤4	①1 ②9 } 10/10 ③0 (人) ④0 ⑤0	
ケース2	①0 ②1 } 4/10 ③3 (人) ④4 ⑤2	①0 ②3 } 8/10 ③5 (人) ④2 ⑤0	①3 ②6 } 10/10 ③1 (人) ④0 ⑤0
ケース3	①0 ②2 } 3/10 ③1 (人) ④6 ⑤1	①2 ②4 } 8/10 ③2 (人) ④2 ⑤0	①3 ②3 } 8/10 ③2 (人) ④2 ⑤0

①よく理解できる  
②理解できる  
③どちらかと言えば理解できる。  
④あまり理解できない  
⑤全く理解できない。

1回目の研修では、ケース1では、研修前は①～③が6/10、研修後は10/10に。ケース2では研修前は、①～③が4/10、研修後は8/10に、2回目研修では10/10に変化していた。また、ケース3では、1回目研修前では、①～③が3/10、研修後は8/10

(①2人、②が4人)に、2回目研修後は8/10(①3人、②3人)といずれも、理解が深まっていた。尚、1回目研修後のアンケートの結果では、ケース2と3に関しては十分な理解が得られてないことが分かったので、2回目の研修では、研修参加者Bさんのヒアリングを通して学んだ「共依存」や「ケアの中での性被害」の視点や「カウンセリンググループPomuの性的いじめの事例」を加えて、再度補足説明をすることとした。

表2. 「義父から性的虐待を受けた女子」のケースの感想

1回目研修前の感想	1回目研修後の感想
何年も虐待にあっているのは本当にかわいそうだし、どこかで早く気づけなかったのか。	自己肯定感の獲得に向けて、電話のやり取りでそれができるように十分聴いていく。
子どもの時からの性被害の実態が生々しい。本人が何の罪もないのに悩み続けることに胸が痛む。研修前からあり得ると思っていた。	子どもの脳は未発達で自分をコントロールできない事。性的被害を受けた後遺症としての反復行動や誰にも打ち明けられない気持ちがわかった。
このような性被害に子どもがっている時、周りの大人はどうして誰も気が付かないのか？子どもはお母さんになぜ訴えないのか？	心的外傷の出来事が表現された遊びをすることが、性依存にはあると知ったので彼女の行動が理解できた。自分自身が原因なのではなくて、過去の影響で脳が普通とは違った感覚を求めていることを伝えたい。

父親からの性的虐待が原因での性嗜好と思われる。自分ではコントロールできないのかもしれない。	「あなたは大切な人」「今からでも変えられる」「あなたはどうしたいの？」と自尊感情を育てるように今の気持ちを聴くような声かけをしたらよい。傾聴こそが大切と思った。
ひどい父親だと思った。子どもは成長してからも心に重荷をしょっていかないといけないのだと思った。	脳の働きの二極性を知ったので理解できる。自分を責めないように受け入れ、じっくり話を聴き寄り添うこと。行動を否定的に評価せず、人格を傷つけないことが大切と思った。

表3. 「母親の性行動に悩む男子」のケースの感想

1回目研修前の感想	1回目研修後の感想	2回目研修後の感想
<u>こんなお母さん本当にいるのだろうかと思った。</u>	嫌だという拒否の態度が必要であるが、それができない何かがある。それを認めてあげ、寄り添っていくのが良いと思う。	親子の共依存の関係性は複雑で難しい。親に心配かけたくないので、学校で受けている「いじめ」で悩んでも親には話したくないという電話はよく聴く。これも一種の依存なのか。それにしてもこの母親のケースは私の理解の範囲を超える。
<u>こんな母親が現実にいるとは思えないし、理解に苦しむ</u>		
母親が子どもの教室や他人のいるところで自分をコントロールできない点が理解できない	不登校の原因が母親の性化行動だったのかが不明。このケースは母への依存が強いのではと感じた。	身体のケア見たいな感じで、息子に性的行為をおこない親が自己満足し、子ども親が世話を焼いてくれていると思うことがあると思うと、母子の依存関係はどのように気付いていくのがいいのかと考えさせられた。
理解できないが、しかし彼の話していることは作話ではなさそうとも感じていた。	<u>母親自身の性被害体験・トラウマが、性化行動で表現されている。電話のかけ手は自分が我慢すればよいと抵抗せず、母の相手をするのが役割化する共依存傾向の印象を受けた。「母は優しい」は被虐待児に特徴的な言葉では？母親に利用されて抵抗できない、NO！と言えない関係が課題だ。コーラーに母親と切り離し、“あなたはあなた”というのは、突き放された気分になる。”嫌なことを嫌と言いなさい“というアドバイスによってそれができない本人は自己嫌悪を抱く。母との関係性から抜け出せないために電話をかけたのに、このような応答では大人は自分の真の苦しみを理解できないと感じるだろう。</u>	
<u>高校生の年齢なら、母の行動を止めて欲しいといえないのだろうか？母親の行動を女性として見ている部分があるのだろうか。母の性依存、成育歴に問題</u>		本人と母親と同時にケアが必要だと思う。私たちが話を聴いても容易には男の子に「あなたが悪いわけではない」と母親の行動と自分野感情を分けて考えていくことを伝えていくことが必要。本人を否定しない、 <u>母親も否定しないことが大事。母親の成育歴が気になる。行政の介入ができればよい。</u>
母親の行動が原因で、災害がすべてこの子に降りかかってきている。嫌だと言えない何かがあるのだろうか。		

表4. 「性的いじめをうけた男子」のケースの感想

1回目研修前の感想	1回目研修後の感想	2回目研修後の感想
作話と感じた。作り話か、どうしてこのような話をするのか？原因は何か？	作り話？単なるいじめとして先生に相談できるように援助できればよい。	嫌と言えない心理状態も少しわかった。いじめられているのに相手にしてくれると嬉しいと思う！涙がでそうでした。
いじめの種類が変わってきていると感じた。	性的いじめの電話を受けた経験があるが、初めは”どこまで本当だろうか”と疑念を持った。でも、泣き出してしまったので本当なんだと知った。研修を受けてトラウマがいかに人を壊すのか、そして壊れてしまった心は簡単に修復できないことが理解できた。	苦痛や恐怖の環境に置かれても、性的興奮があることが分かった。その場合自分を守るために心と身体の解離を起こしたり、トラウマになることも理解できた。その環境から逃れられないかとも。性的いじめの電話を受けた経験があるが現実を理解して真摯に聴くしかないと思う。
ただの性的電話ではないことは分かったけど、脅かしの脅かしながらも、性的興奮あるのか？	性的いじめを経験した男子は、何かしらのトラウマを持っていて、こういった電話をしてきているのだろうと理解した。自慰行動をとることに対して考え方が広がった。今後のこの男子の気持ちが心配。	
いきさつにリアリティ。具体性がある一方、性的電話とされる面もあり区別しがたい。	「あなたは悪くない」ことを伝えることが必要であるが、電話での自慰行為を繰り返しているようであれば、自慰行為は自分で解決できるように説明することが大切と思うが、電話の向こうのことは推測での話しなので、CLの受け手が電話を切ることも難しい。	トラウマと快感は真逆のようで、実は表裏一体と学んだ。一見かけ手が興奮し、快感を得ているような電話でも、トラウマの裏返しという可能性があること認識が変わった。
いじめの前半は陰湿ないじめだと思った。後半は作話かなと感じた。		性的いじめによるトラウマによって性体験の欲求に苦しめられている。CLとして苦しみに寄り添うしかできないが、本人が医療分野のケアに繋がるとよい。
いじめの構図の典型、無抵抗にならざるを得ないだろう。		1回目より良く理解できた。男性の性的被害についてその人に与える影響は性と同様に後々まで深刻だということが分かった。
電話で「いじめられている」というケースはよく聞くので、子どもたちにはあるケースだと思った。		

<p>恐怖の環境下では普通の男性は性器を刺激しても、勃起したり射精できないので作話だと思った。</p>	<p>まだわかりませんが、半分本当で半分作話かなと思える。</p>	<p>思春期の中学生時の性的ないじめ体験は、後々大人になってもPTSDとして異常な性癖に進んでしまうこともある。電話では否定せずかけ手の話を聴く必要がある。</p>
<p>女子マネージャーの事とか、本当かなと思いました。いじめの凄まじさにゾットしました。</p>		

表5. 2回目研修後の全体を通した感想

<p>聴くことしかできないけど、だからと言って聴くだけでよいのかというジレンマがある。やはり外と繋がってしかるべき相談所に行って欲しい。今はできなくても将来的にはアクションを起こして自分自身を癒して幸せになってほしい。今言えることは「一人で悩まないで良くここに電話をかけてくれたね。辛かったでしょうね。」踏み込めたら「あなたが新しいあなたに出会うために、誰かに助けてもらうことが必要だから、専門家に助けてもらおうね」と言いたい気持ちはやまやまですが、それはどこですか？誰ですか？と聞かれたときに何も手持ちがなく、それも言えない、CLの限界だということを認識するしかないのか。</p>	<p>研修で取り上げたケースについては実際に起こっていることとして理解できた。人を理解するには人の身体と心の発達に関係しているので今までの成育歴を知ることが大切と思う。声だけの対応のコーラーでは傾聴が基本だと確認した。対応の正解はないと考えると、多様な性の理解について受け手側の私たちが学び続けていくしかないし、何かをしてあげたいという思いを大切に、介入できない部分に境界線を引くことも必要だと感じた。</p> <p>子どもたちの「聴いてもらいたい」「わかってもらいたい」の声を聴くことで、CLの使命は一つ果されていると思う。今後は子どもたちの声から気付いたことを社会に発信するを具体的に考える研修を設けたいと思った。</p>	<p>SEX 電話と思われるものでも、背景には何かトラウマがあるかもしれないという視点は不可欠だと思う。性被害に関する視野は拡大したが、対応の難しさがのしかかってきたように思う。</p> <p>深い話を2回にわたってありがとうございました。ただ、性の事例に踏み込んだ話になるとあまりにも専門的過ぎてちょっとしんどいという気持ちが正直なところだ。知ることができたのやとても勉強になったが、CLとして私たちがどういふうに対応し、相手を思いやると同時に、自分の尊厳も守るのか。性に頻回者にどういふうに対応していくのか。性の頻回者からの電話が多いが、研修を電話活動に活かす方法をみんなで考えたい。</p>
---	---	--

## 2) 感想のまとめ

### ① 1回目（研修前・研修後）・2回目の研修の感想

#### ケース1 「義父からの性的虐待を受けた女子」(表2)

「1回目研修前」では、「なぜ、子どもは母親や周囲の大人に言えないのか？」と言う疑問が寄せ

られていたが、「一回目研修後」では、「誰にも打ち明けられない気持ちが分かった」という感想や、性的虐待を受けている子どもに「どのような聴き方をすればよいのか？」など研修での学びをCLの活動に反映させていこうとする感想が寄せられた。

### ケース2 「母親の性行動に悩む男子」(表3)

「1回目研修前」(下線部)では、参加者からは「こんなお母さん本当にいるのだろうか」や「こんな母親が現実にいるとは思えないし、理解に苦しむ」という感想が寄せられていた。筆者は、これらの感想に対して、母という存在は子どもにとって良いものという考え＝「母性神話」の影響や、電話の受け手が母親と言う属性からもたらされる経験や思いを一般化し、自分の“当たり前”を他者に当てはめていると思った。電話をかけてくる子どもたちの中には、虐待的環境におかれ、家族や親から逃げだしたいと思うなど、親を怖がったり嫌悪している子どもたちもいるのである。

しかし、「1回目研修後」の感想では、「母親自身の性被害体験・トラウマが、性化行動で表現されている。」と母親の行動を理解するような感想に変わってきた。

また、母親への依存を指摘する感想も複数あった。特に注視させられたのは、「このケースは母親の性的トラウマというよりは、母への依存の方が強いのでは？」と「自分が我慢すればと抵抗せず、母の相手をするのが役割化する息子の共依存の傾向」についての指摘だった。「母親と切り離し、“あなたはあなたとして生きなさい”、というアドバイスは、母親に“嫌!”と言えず、母との関係性から抜け出せない本人が自己嫌悪を抱く」という子どもの視点からの意見だった。この感想を書いた参加者のBさんに、筆者は研修後連絡して、ヒアリングの機会を得た。Bさんは、親からの虐待によりシェルターに保護された経験があることを、その時初めて知らされた。筆者はBさんからのヒアリングを通して母親による養育(ケア)の中でなされる性的虐待・心理的虐待の実相と共依存の視点を学び、それを2回目の研修に活かすようにした。

すると、「2回目研修後」の感想では、「本人と母親と同時にケアが必要だと思う。」「母親も否定しないことが大事。母親の成育歴が気になる。」という受容的な感想も見られるようになってきた。

### ケース3 「性的いじめを受けた男子」(表4)

「1回目研修前」の感想(下線部)では、男性の参加者たちからは、「脅かしに遭いながらも、性的興奮あるのか?」とか「恐怖的环境下では、普通の男性は性器を刺激しても、勃起したり射精できないので作話だと思った。」などの感想があった。参考事例や医学的な知見を研修で説明すると、自分たちの最初の見解が間違っていると納得できたようだった。我々は各自色々な属性を持っているが、その属性に基づく経験はすべての人に当てはまるものではないと思う。「1回目研修後」の感想(下線部)では、「研修を受けてトラウマがいかに人を壊すのか、そして壊れてしまった心は簡単に修復できないことが理解できた。」というものや、更に「2回目研修後」の感想(下線部)では、「苦痛や恐怖の環境に置かれても、性的興奮があることが分かった。その場合自分を守るために心



と身体の解離を起こしたり、トラウマになることも理解できた。」との感想があり、研修の成果を感じた。

## ②全体を通した感想

表5の(下線部)のように「聴くだけでよいのかというジレンマ」「性被害に関する視野は拡大したが、対応の難しさがのしかかってきた」「介入できない部分に境界線を引くことも必要」「子どもたちの声から気付いたことを社会に発信することを具体的に考えたい」「辛かったでしょうね。中略 誰かに助けてもらうことが必要だから、専門家に助けてもらおうね」と言いたいのが、どこだと聞かれるとそれが言えない。」という感想が寄せられた。

また、「性の事例で踏み入った話になるとあまりにも専門的な内容なのでしんどい」という感想もあった。研修において、性的虐待や性被害のケース場合に被害の深刻さに圧倒され、受け手が心的外傷を受ける場合がある。そうした「援助者の二次的外傷性ストレス」の防止にも留意しなければならない。

今回の研修においては、CLの3つのケースの理解において虐待被害者からのヒアリングやカウンセリングの臨床事例などを援用したが、よく似たケースであっても、ケースの個別性があり、同一のものではないということを肝に銘じておく必要があると思った。

## おわりに

厚生労働省によると、2018年の全国の児童相談所が対応した性的虐待は1730件、児童虐待防止法が施行された2000年度の2・3倍に増えた。ただ、性的虐待は傷が見えにくく、周囲に気づかれにくいので表に出ているのは氷山の一角という。

昨今、マスコミで取り上げられる性的虐待、近親姦、少年の性的虐待事件は、CLでは事件ではなく、発覚以前の潜在化した子どもの秘密の出来事として日常的に語られている。CLはこうしたケースの宝庫である。今回、ヒアリングを実施し、ケースを深く読み解くことでベールが剥がされるように、隠れた部分がみえてきた。単にSEX電話と思っていたケースがトラウマや性依存、共依存、愛着障害の問題など深い問題が隠れていることが分かった。

今回ヒアリングをさせてもらった性被害を受けたAさんやBさん、ケース3で参考にしたSさんは、一生を左右する大きな傷を心と身体に受けている。Aさんは複雑性PTSDのためにカウンセリングを現在受けているという。Bさんも心の病のために病院で治療を受けている。Sさんも男性性被害の専門とするカウンセリングルームでセラピーを受けている。いずれも大人になってから、トラウマの治療を始め、回復をめざしている。被害当時の子どもの時期には被害が表面化せず支援の手も届かなかったからである。性被害経験のある人や児童養護施設出身者等<sup>9)</sup>の声を聞くと、大

人になってから性被害のトラウマで苦しんでいる人は多い。

今回、CLの研修で取り上げた3つのケースでは、被害の子どもたちは具体的な支援はなされていない。被害が発見されず潜在化したままである。チャイルドラインができることは、こうした埋もれた声を可視化し、社会に発信することで「子どもの声」を社会化していくことである<sup>10)</sup>。そのためには、子ども関係者などとのネットワークを作り、地域の中で生じていることの情報交換を通じて、子どもの断片的な情報を繋ぎ合わせ、子どもの全体像を把握することが必要だと考える。

もう一つの課題は、CLのあり方に関する課題である。研修参加者の声（表5下線）として研修内容が「あまりに専門過ぎて、ちょっとしんどいという気持ち」「性被害に関する視野は拡大したが、その分対応の難しさ」を指摘する声があった。CLのボランティアは心理療法を行うカウンセラーでも社会資源を用いて問題解決を図ろうとするソーシャルワーカーでもない、子どもの隣人、ピア的存在として、「子どもの心の居場所」になるように子どもたちの声を聴いている。

作話とも妄想とも思える多様な性の電話が混在する中、これまでは、「理解不能な電話」「作話」として聴いてきたようなケースが深く読み解くようになったことで、その出来事の与える影響の重篤さや深刻さに圧倒されたり、具体的解決策に繋がらないというジレンマや自己不全感がいっそう大きくなっていく可能性もなくはない。

子ども声を聴くというCLの役割と限界を自覚し、子どもの性の問題に対応していくためには、CL北九州が「性の課題」を一団体に抱え込んで疲弊してしまうのではなく、子どもに今何が起きているかを社会発信し、同じような課題を抱えた子ども関係者<sup>11)</sup>たちと繋がり共有していくことで打開策を見出していくしかないと思っている。

註記

- 1) 近年、CLでは電話が苦手という子どもたちもいるので電話だけでなくコミュニケーション・ツールの一つとしてチャットも始めている。
- 2) 当時は2009年からの全国フリーダイヤルの開始前で、北九州からの電話を優先的に聴いていたので調査報告書は「北九州市の子どもの性の現状と課題」としている。
- 3) ケース1では、性被害が疑われるケースで自慰行為が止められない、性器へ異物の挿入する女子など、ケース2では女系家族の中で赤ん坊のように扱われる（身体的接触も）男子、ケース3では性的いじめに関するケースで、性被害が重なるうちに性的興奮や勃起がおこり、制御不能になり頭が変にならないか不安と訴える男子などの例が複数ある。
- 4) 幼い頃に不適切な養育（虐待や育児放棄）を受けた子どもは、安心感や愛情が満たされないため、親子の愛着（アタッチメント）がうまく築けなくなる愛着障害になることがある。脱抑制型愛着障害（脱抑制型対人交流障害）は、初対面の見知らぬ大人にも警戒心なく近づき、過剰になれなれしい言葉や態度で接して、ためらいなくついて行くなどの行動がみられる。一見すると注意欠如・多動症（AD/HD）のような症状を示す。
- 5) 榎本稔「子どもの性加害と被害」『性依存症の治療』（P.87-88）参照
- 6) 「男性も性被害に遭う」『西日本新聞』（暮らし面）、2013年12月16日、引用
- 7) 「過去に性的虐待を生き抜いてこられた男性のために」<https://www.pomu.info/>
- 8) アンケートの回収は、手書きの場合FAXやスキャナーの分は文字が薄かったり黒かったり、写真で撮った分は枠が切れていたりずれていたり、判読可能な回収分の半分ぐらいしか読めなかった。
- 9) 2020年の「Me to 運動」で、街頭でスタンディングをしたが参加者からの話では子どもの頃に近所や親せきの少年から被害をうけたという声を複数聞いた。これまで教員としてや社会活動をする中で性被害者の声を聴く機会があった。すでに大人になった女性（60代～80代の人も）から、子ども時代に従妹や近所の少年、学校や塾の教師などから性被害を受けたという話を聞いた。「児童養護出身者の声」（動画サイト）でも大学生になった女性が児童養護施設の職員に父親から性的虐待を受けていることを言えず、父のいる家に週末に帰ることを強要され嫌だったことを述べていた。そして現在、トラウマに苦しみ、子どもの頃にカウンセリングを受けていればと告白していた。
- 10) 内閣府男女共同参画局「若年層における性的な暴力に関わる相談・支援のあり方に関する調査研究事業」報告書（平成30年9月）では調査対象として、若年層における性暴力に関する相談・支援団体が対象だが、CLはその調査対象に含まれていない。今日、「性犯罪に関する刑事法改正」の検討がなされている。内閣府は高校生や大学生などを対象に性被害の実態調査を2021年度に実施予定している。CLは日常的に子どもの声を聞いている。性被害の電話の情報を全国的に集約して、性被害の実態調査にかかわり、国の政策提言にいかす取り組みが必要だと思う。
- 11) CLでは、性的被害に関しては、児童養護施設や児童相談所と関わる子どもや特別支援学校や障害児施設にいる子どもからの電話がある。また、不登校やひきこもりの子どもや若者たちの中には親子の共依存の問題を抱えている子どももいると推測される。不登校や引きこもり支援の団体や児童福祉関係者や心理・教育・医療の関係者と連

実践報告 コロナ禍の中、オンラインで実施したチャイルドライン北九州の継続研修  
—性化行動と性被害のケースをとりあげて—

携したい。